

儒家神道における儒教摂取の思想と論理

— 羅山・延佳・惟足をめぐって —

高 橋 美 由 紀

一

私に与えられた課題は、「日本の伝統と外来思想」というメインテーマをめぐって、近世における儒教と神道について論ぜよというものである。そこで本稿では儒家神道の思想を取り上げ、中世神道との連続性と非連続性の問題を軸にしながら儒家神道の思想とその論理を検討することを通して、この課題に答えたい。

周知の如く、神道思想の主たる潮流は、宋学の本格的受容を契機として、安土桃山から江戸初期の境に、神仏習合思想を基盤とするものから、神儒一致に基礎を置くものへと大きな転換を示している。この両者を媒介するものとして吉田神道に新局面を開いた清原宣賢の神道思想があったこともまた、既に指摘されている通りである。⁽¹⁾同時に、南北朝時代の北畠親房や蔡遍の神道思想の中にすでに、儒教倫理や王道思想を神道の中に摂取しようとする動きがあったことも事実である。このように中世神道と近世神道との関係は一面において連続性をもつが、その一方で、仏家神道はもとより、そ

の連続性が認められる吉田神道との間においても、儒家神道は、その実現しようとする世界のあり方において、かなりの相違を見て取ることができる。⁽²⁾

中世から近世へ、神道思想もまた大きな転換を遂げていくが、ここでの思想の連続と非連続の関係の検証は、宋学の本格的流入と伝統思想との関係のあり方を探ることでもある。本稿では林羅山（一五八三—一六五七）、度会延佳（一六一五—一九〇）、吉川惟足（一六一六—一九四）という三人の代表的な儒家神道家を取り上げ、その神道思想における神儒関係について考察を加えることとしたい。このうち羅山は他の二人よりかなり早い世代に属するが、残る二人はほとんど同世代である。林羅山を神道家として論じることについては異論もあるが、彼の神道思想は切紙伝授の存在によっても分かるようにかなり本格的であって、決して儒者の余技にとどまるものではなかった。⁽³⁾また儒家神道の先陣を切ったということからも検討の対象から除くことはできない。

延佳、惟足、そして閻斎の三人はほとんど同時代で、彼等以後儒

家神道は新しい思想的發展を遂げることはなかった。その意味で儒家神道は近世前期を特徴づける思想運動であつたといえよう。以下、それぞれの神道思想の概要を述べていくことにする。

二

「羅山の理当心地神道（王道神道）」

まず、神觀念について。これに関しては、次の三点に要約でき

一、神々は宇宙に遍満し万物を支えている。それらの神々は根源の神である国常立尊の分身である。

神ハ天地ノ根、万物ノ体ナリ。（『神道伝授鈔』神之根本の条）

天地ひらくる時の神を国常立尊と申し、天神七代の第一なり。此一神分身して諸神の総体となる。たとへば天上の月は一輪にて、よろづの水に皆その影をうつすかことし。（『神道伝授鈔』一神即八百万神の条）

二、かかる神々の存在のあり方は宋学の宇宙論に合致する。

国常立尊、一に曰く天御中至尊。古人の口訣に云く、八百万神即一神、一神即八百万神。今按ずるに、万物五行より生ず。五行は即ち一陰陽なり。陰陽は即ち太極也。太極はもと是れ無極なり。ここに於て此尊の奥義以て見るべし。（『文集』六十九）

此一神千變万化シテ、アラユル諸神トナルコト、一氣分レテ陰陽トナリ、陰陽分レテ五行トナリ、五行相生相剋シテ、万

物ヲ生スルノ理ナリ。（『折中俗解』国常立尊の条）

三、神代巻の天神七代の神統譜も宋学の宇宙論そのものである。今按スルニ、天神七代ハ、一氣運動ノ次第ヲ以テ云コト也。

（『折中俗解』天神七代の条）

このような神觀念の上に立つて、羅山は神道と儒道的一致を主張する。

或人問ふ、神道と儒道と如何ぞこれを別たんと。曰く、我よりこれを觀れば理は一のみ。その為（わざ）異なるのみ。

（『文集』六十六）

では、神儒一致の立場から把握された彼のいう神道とはいかなるものか。容易に予測しうるであろうように、それは一つには治世の要道であり、そして一つには道德的な道である。

まず、第一の点。

璽は仁に象るなり。劍は勇に象るなり。鏡は智に象るなり。

もと此の三徳を具ふる者は神明なり。それ心は神明の舍なり。既に三徳を具ふるときは則ち神豈遠からんや。（『文集』六十九）

神道は治世の道（王道）であり、その要諦は三種神器に象徴的に示されている。即ちそれは儒教的徳治主義にもとづく政治である。神道が為政者にとつての治政の道であるとすれば、被治者にとつての神道がそのような政治に対応しうる儒教的徳目の実践とされることは見易い道理であらう。羅山が、

善ヲシリテヲコナイ、惡ヲシリテセス。君ニ忠アリ、父ニ孝アリ。タカキイヤシキノシナヲシル。昔ヨリ末代ニイタルマ

テ、イツレカマコトナラサラン。コレヲ神道ノ実理トイフ。

(『神道伝授鈔』神道之実理の条)

と説いて、儒教倫理の中でもとりわけ忠孝の徳目を「神道の実理」として強調する所以である。

さらに、羅山は儒教倫理の実践と神道の清浄観とを結びつける。

すなわち、彼によれば大切なのはこの道徳の実践主体としての心のあり方である。神道が伝統的に強調してきた心の清らかさとは儒教倫理にかなう心のありようであり、したがって祓とは人間の道徳性の回復をいう。人間の道徳実践の根拠は理であり、それは心に宿るからである。羅山が自らの神道を理当心地神道と称する所以である。

アヤマチヲ悔テアラタメテ善トナルヲ祓ト云。アヤマチヲアラタムルヲ神ハウケタマフナリ。(『神道伝授鈔』祓之事の条)

心ノ上ニテイヘハ、智ハ清ナリ。愚ハ濁ナリ。正シキ智ハ清ナリ。ヨコシマナル智ハ濁ナリ。慈悲ハ清ナリ。慳貪ハ濁ナリ。スクナルハ清ナリ。マカレルハ濁ナリ。道ヲコナフハ清ナリ。無道ナルハ濁ナリ。忠孝ハ清ナリ。不忠不孝ハ濁ナリ。善ハ清ナリ。惡ハ濁ナリ。此等ノ事ヲコナフハ身ノ清ナリ。ヲコナハサルハ身ノ濁ナリ。此等ノ事ヲ思フハ心ノ清ナリ。思ハサルハ心ノ濁ナリ。心清ケレハ身モ清シ。心濁レハ身モ濁ル。惣シテ濁ハ穢ナリ。故ニ神ハケカレヲキラヒ給フ。(『神道伝授鈔』穢之事の条)

ともあれ、羅山の神道説は基本的には「帝御一人しろしめす」為

政者の道であり、儒教的徳治主義にもとづく王道政治そのものにはかならない。被治者について言及されるにしても、それはかかる王道政治に応える存在としての人間のあり方という範囲内でのことなのである。

一 理当心地神道

此神道ハ則王道ナリ。心ノ外ニ別ノ神ナク別ノ理ナシ。心キヨク明ナルハ神ノ光ナリ。行跡正シキハ神ノスカタナリ。政ノオコナハル、ハ神ノ徳ナリ。国家オサマルハ神ノ力ナリ。是ハ天照大神ヨリ相伝マシマシテ、神武天皇以来代々ノ帝王御一人シロシメス事ナリ。(『神道伝授鈔』神道之奥義の条)

〔延佳の神道論〕

延佳は羅山や惟足と異なり、伊勢外宮の神官という立場からその思想を形成した。彼の神道思想の特色としては、血脈の論理に支えられた自国中心主義とならんで日常生活の道としての神道の主張があげられる。かかる神道の捉え方には、儒教思想の影響もさることながら、伊勢信仰の庶民化に伴う太神宮信仰の高まりという時代状況が反映しているものと思われる。以下、彼の神道思想の要点を個条書きで列挙する。

一、神道は神国たる日本の固有の道であり、上下万民の従うべき日用の道である。

神道と申は神代より此国の道なれば、朝廷にとどまり可レ申事なり。(中略)神道と云は日本の主の御身に行ひたまひて万民までに教たまふ道なり。我朝は神国にて君は神裔にましまし、万民は神国の民なれども、末代となりて道のみ神道に

はあらず、異国の道なる事口惜こそ侍れ。（『太神宮神道或問』）

神道と云は上一人より下万民まで行ふ旦暮の道なり。天神地神より相伝の中極の道を根として行ふ時は、日用の間神道ならずと云事なし。さて是は神道なりと一々指南に及ぶべき道にはあらず。（『太神宮神道或問』）

神道と云は、前にも申様に上一人より下万民まで、毎日身に行ふ行住坐臥にある道也。祭祀とても神道の外にてはなく、神道の第一として重くする事なり。（『太神宮神道或問』）

二、神道の内実は、日々の振舞が中正（中極）を得、五倫、五常にかなうことである。

それ神道と云は、人々日用の間にありて、一事として神道あらずと云事なし。君神道を以下にのぞみたまふ時は仁君なり。臣神道を以君につかへ奉るときは忠臣也。父神道を以子をやしなふ時は慈父なり。子神道を以父母につかふるときは孝子也。夫婦・兄弟・朋友の間も神道を以まじはる事ぞかし。其外飲食するにも神道あり。手を挙るにも、足を挙るにも神道あらずと云事なし。（『陽復記』）

三、神道と儒教との一致は、（ア）神代巻の記述が易の教えに合致すること、（イ）三種神器が智・仁・勇の三徳を象徴していること、等から明らかであるが、それは「天地自然の道」は国を越えて共通するからである。

此国常立尊より三代は一神つつ化生し給のよし、日本紀に見え侍る。しかるを此三神は、易乾卦の奇爻を表してかくしる

すならんと云人あれどきにはあらず。我國のむかしより語り伝たる事の、をのづから易にかなふ故に、神書を撰べる人の易と付会したることばあり。日本の神聖の跡、唐の聖人の書に符を合せたる事はいかがと思ふべけれど、天地自然の道のかの国この国ちがひなき、是ぞ神道なるべき。（『陽復記』）此三種の神宝は、智仁勇の三徳を表したるとふるき伝あるにぞ、孔子の道は我國の神道にひとしき道とおもはる。或は玉は柔にとり、劍は剛にとり、鏡は正直にとりて、柔剛正直の教に同じと親房卿の作の東家秘伝といふ物などにはかかれたり。是もむかしより伝る所のあればなるべし。しかればかの洪範も我神道にひとしきか。（『陽復記』）

四、しかし、神国に生を受け、神の血脈を受け継ぐ天皇および將軍をいただく日本人は、神道を根本の教えとすべきである。まして皇統の不易が象徴することく道はこの日本において実現されているのであつて、神道こそが「最上の道」なのである。

かく神道・儒道其旨一なれば、其逆によりて修する教のかはる所はあるまじけれども、異国と我國と制度文為はちがひめ有。（中略）神国に生れたる人は神代のむかしを思ひ、国法の古をしたふこそ儒道にも本意ならめ。（『陽復記』）

五、我國は天地開闢、国常立尊・天照太神より相伝せる神道にて、御血脈も今上皇帝まで相統し給ひ、幕下は清和天皇の御苗裔にましませば、公武ともに国常立尊・天照太神の御血脈、神道の血脈は是に過たる事あるべきや。（『太神宮神道或問』）日本人として日本の道である神道を根本とする心、即ち「忠厚

の心」がしっかりと確立していれば、儒仏を尊び神道の輔翼として用いることはさしつかえない。

我国の神道に易道は同じと見るこそ忠厚の道ならめ、易道に神道は同じきといふはいかがと思ひ侍る。（『陽復記』）

天御中主尊より相伝の中極の道なれば、今の仏道も儒道もたゞ其まゝにて、忠厚の心を以て日本国を主として中極の道を行ふ時は、儒道も神道と成、仏道も神道と成なり。（中略）中極の道を以て時にしたがひて、日本国の神道を根本として偏僻の心なく行ひ、儒道ならば真儒を尊び、仏道ならば清淨の比丘を尊で、少にても倭国の神道に混ぜずして、柳はみどりの色に、花は紅の色に、他の色を雜ずしてただ其まゝに行ひて時節に相應して、たとへば神代は夏、今は冬ならば、神代の夏に著たりとて単衣をかかはり著ずして、当世の冬のかさねぎするが神道なり。（『太神宮神道或問』）

これを要するに、延佳の説く神道とは、正直な心にもとづく中道を実践し各人がそれぞれ置かれた立場立場においてその職分を尽くし、厚く神々を信じ神恩を感謝しつつ生きていく生活の道なのである。

天御中主神の中極の道を神道と云事なれば、中道を修行し、正直の御教を信じて任_レ本心_一し、又從_レ正以爲_レ清淨_一、隨_レ惡以爲_レ不淨_一、との神記を恐れて、起居動靜に心の塵を去り、無_レ黒心_一以_レ丹心_一清潔齋慎、左物を右に移さず、右物を左に移さず、左を左とし、右を右とせよ、との御教を守りて、天下の主にてまさは、天下万民をあわれみ給ひて、君上の御職

分をつくし給ひ、諸臣下は右の御教を守りて、忠をつくして君につかへたてまつり、一国一家の上下も亦かくのごとく、父子・夫婦・兄弟・朋友も彼御教を守りて、父子・夫婦・兄弟・朋友のすべき道をつくし、士農工商までも彼御教に順ひて其職をつとむるを、左を左とし、右を右とすと申なり。

（『太神宮神道或問』）

「惟足の理学神道」

吉田神道の道統を継承し、その近世化を計ったのが吉川惟足である。その思想は、吉田神道と朱子学の思想を結合し、神道を君臣関係を中心とする倫理教化しようとしたものと見る事ができる。

一、道とは天地陰陽の理であり、天地と共に出現した神によって立てられたもので、人たるものの離るべからざるものである。

道の太元は陰陽ぞ。陰陽則ち天地と形す。天地は則ち夫婦父子、君臣の根本ぞ。天地合体して万物を生ず。（中略）神明の道の根本は、天地陰陽の外にあらず。（『神道大意講談』）吾国のみちと云処に、道の字を書いたは、能く其理叶ひたる故也。道須臾不可_レ離と中庸に云へるに、よく似合ふたるところぞ。神明の天地と俱に顯はれ生じて此道を立てられたぞ。道は世界の海道の如し、（中略）人々ふまへて居る道路のやうに、須臾くも離るゝことなきものは此道なり。

（『神道大意講談』）

二、道に神道・儒道・仏道のちがいはあるがその根本は神道にある。神道の道は一般の道と異なり根源的、無限定的である。

老子の道可_レ道非_レ常道_一は吾道に近きか。（『神道大意講談』）

天地と共に起りたる道を指して、神道と云時の道と説くぞ。習ひの道は天地の以後ぞ。（『神道大意講談』）

天竺漢土の道とても天地の理の外を云はず。然れども其国の風によつて教る所にたがい有といへとも、皆吾道の末流也。

（『神道大意抄』）

三、道の本体、道の根源は天地未分の混沌にある。混沌は理氣が混融し未だ万物を形成しない状態をいう。それは同時に根源の神である国常立尊の本体である。

此国常立尊と申すは、常の神には非ざる也。天地に先立ちて天地を定め、陰陽に起（さきだち）て陰陽になる全体をかりに名付て神と云。（『神道大意講談』）

四、この国常立尊は「一切を含で天地をも万物をも、生化する処の太元」であり、「唯一神」であつて、儒教の太極にあたる。それは人間にあつては神の計らいにより心の性として付与される。これ即ち「天命」の性である。（『神道大意講談』）

五、この心の性は国常立尊にはかならないが、氣質に曇らされて性の十全なる発現が妨げられている。そこで大切なのは敬（つつしみ）である。

禽獣には天性はそなはれどもつつしみなきゆゑに禽獣と云。

人は天に命ぜられ慎みある故に、人は万物の長たり。つつしみの道理を朝夕合点するとまことの人也。人々も己が心の吾ままばかり有と禽獣と同じき也。神明に向、君に向、親に向も、みなつつしみの道理を以て守る也。（『日本書紀聞書』）
善惡を知て惡を忌が敬なり。（『神代卷惟足抄』）

六、この性の発現をとおして実現すべき人たるの道とは、儒教的五倫五常の道であるが、とりわけ君臣の道がその中心である。また被治者にとつては農工商の生業に励むことである。

五倫は人道の当然に待れば五倫の名目は儒も同ふして其内前後に用る替り侍る。儒は孝を以て五倫の第一とし侍る。吾国は忠を五倫の第一とし侍れば、君道を人道の最上と教へ給ふがゆへに、忠義を以て五倫の本とし侍る。（『神学承伝記』）人と云ものは、君は臣下万民をめぐみ、臣は君に事まつり、万民をたすけ、万民は農工商の業をして上に仕へ、男は妻をあはれみ、女は夫を尊むべき由を、天より命を受けて生ずる也。（『神道大意講談』）

七、世界万国の根元、神国たる日本に生をうけた神の子孫たる日本人はこの神道をこそ崇め信すべきである。

何れの国に生れ、いかなる人が、此道理を聞きて、我日本を不^レ仰ものあらん。然るに我國に生れて、神の子孫たる人、神国の粟を食みながら、他方の道をあがめ、吾先祖の道を不^レ知、たとひ万巻の書をそらんずとも、一文不通の盲人と云べし。（『神道大意講談』）

三

以上、羅山・延佳・惟足の神道思想について、その概要をみてきた。これら三者の間にはいくつかの共通点をみてとることができ

る。一、道は普遍的なものであり、神道はかかる道の特殊的顯現であ

る。儒教もまたこの普遍的な道の顕現であるとする発想。

二、神代巻や三種神器を儒教思想によって解釈することによって、神道を治世の要道ないし生活倫理としてとらえようとする道徳教への志向性。

三、日本の特殊性の自覚と尊重の意識。

以下、これらの点について中世神道と比較しつつ詳しくみていく。

まず、第一の神道と道の関係についての捉え方であるが、このような発想は中世神道以来の伝統的な発想である。中世神道において道は人間の知覚を越えた絶対的で普遍的な存在とされた。道は、それ故、そのものとして自己をあらわにすることはない。常に、神道や儒教、仏教などの個別的な教えをとおして自己を開示する。

この根源的にして普遍的なる道とその個別具体的な顕現としての神儒仏という考え方は中世の伊勢神道がその思想形成にあたつて道家思想を援用したことに由来する。伊勢神道のかかえていた思想的課題は、その当時の本地垂迹思想にもとづく神仏習合思想から脱却し、カミ信仰を主体とした神道思想を打ち立てることであつた。そのためには、仏教の相対化をはかる必要がある。そこで伊勢神道は道家の「道」の観念を援用し、神仏ともにこの根源の「道」の顕現なりとすることで仏教の相対化をはかるとともに、さらにはこの「道」の観念によって神統譜の冒頭に出現する国常立尊を説明し、神道の理論化の重要な柱としたのである。かかる「道」と神儒仏の關係についての考え方と神国思想を結びつけることによって、伊勢神道は神道の存在意義を確立し得たのであつた。

例をあげよう。度会行忠は、その著『伊勢二所太神宮神名秘書』において、神統譜の冒頭に登場する国常立尊について道家思想を援用しつつ説明する。

竊就古事粗考元始。古天地未分。神聖未形。湛然凝寂。為三化之本。謂之諸神之本也。杳冥恍惚莫測。涯際。天法道而精氣自成焉。地法天而万物成長焉。惚道始無形狀。而能為万物設形象。生於虛無之中。受大意之象者也。故曰。道生陰陽。々々生和清濁。三氣分為天地人。々々生万物。若道散為神明。流為日月。分為五行。万物之樸散則為器用也。

さらに、度会家行の『類聚神祇本源』は、冒頭の天地開闢篇において、まず漢家の部を立てて、『老子道德経』『老子述義』『莊子』等の道家思想、さらには『周子通書』などの説を引いて天地の始源について説いている。家行はまた同書の神道玄義篇の末尾において「神道之興蹟。古典之旨帰。大底雖一致。依見有異端。」と述べ、神儒仏道等諸の教の一致を認める。

他方、神仏習合の思想的な基盤をなした仏教の本覚思想や本地垂迹思想もまた、中世の三教一致思想を醸成する一翼を担ったものとおもわれる。

かくして、儒仏道の教えを神道の教説に援用することは当然のこととされるが、かかる発想の背後には、根源的にして普遍的なる「道」とその特殊の顕現としての神儒仏という思想が存在している。「仏法は万法の花実たり。儒教は万法の枝葉たり。神道は万法の根本たり。彼の二教は皆是れ神道の分化也。」との有名な根葉花

実論や、吉田兼俱の「神と云ひ儒と云ひ仏と云ひ、その道一なり」（『日本書紀神代抄』¹⁷）などの言葉に示される三教一致思想は、このような中世の「道」の觀念によつて支えられているのである。

「道」の根源性、無限定性の強調は元來教典や体系的教えを持たなかつた神道が儒仏道の教えに對峙しうる教説をうちたてようとしながらも、これら他の教えに立脚することによつてしか自己を開示しえなかつたことの當然の帰結であつた。近世の儒家神道もまたかかる中世以來の伝統的な道の觀念を繼承することによつて、安んじて儒教思想と神道をつなげることができたのである。

このような道と神道の關係についての發想は、「風土論」的考え方と結び付いて神道の独自性の主張へと展開する。つまり儒教は中國に相應の、仏教はインドに相應の教えである。そして日本に相應の教えは神代以來の神道であるというのである。惟足が「其土地に隨ひて、相應の教へ」「其教の言は、其土地の人情による」と土地・人情を強調するのはかかる考え方を示す。延佳の「理は異國の理、我國の理として二つなければども、法は形にあらはれたるものなれば差別あり」との言葉もかかる考え方の現れとみることができ。延佳や惟足が儒仏の教えを援用しても習合してはならないと主張するのは、このようなその國にはその國相應の教えがあるとの考え方によるものとおもわれる。

第二の道徳的な教えとしての神道の主張は、中世神道と儒家神道とを分かち最も大きな点である。確かに中世神道にもこのような神道觀がないわけではない。とりわけ南北朝期の動亂の時代に生きた慈遍や北畠親房等の神道觀にはこのような傾向が顯著である。慈遍

は言う。

天地一人の皇徳を君の道と名付く。抑、我國には是を神道と申せり。（『豊葦原神風和記』¹⁸）

北畠親房また三種神器の解釈を軸としつつ、君臣上下の則るべき「神國の要道」として神道をとらえている。『元元集』神國要道篇において、親房はこう説いている。

古欲御大道明徳者、先修其身、修其身者、先正其心、欲正其心者、在于致知、学者伝習分派異流、雖云「积氏金口之八万、李老玄言之五千」、大底不出此義也、（中略）皇祖天照太神手持三種宝器、口伝三句要道、与日月俱懸、与天地俱不朽者也、伝瓊玉者、欲使修其身克妙也、伝宝鏡者、欲使正其心克明也、伝神劍者、欲使致其知克断也、修身如瓊無傷害之危、正心如鏡無毫釐之邪、致知之道無他、所向必於仁、无慾舍己不怠不荒、為民有功者、以无私而即賞、為国有害者、以无私而即罰、造次顛沛不主喜怒之情、仁而中道、此以為得也、伏冀御宇之聖皇在官之八十氏人等、留心於此道、与神齊其明者、安諸天下在於掌中焉。¹⁹

しかしながら中世神道の總決算ともいふべき吉田神道においては、このような神道の道徳的側面の主張は後退し、天地自然との宗教的一体化の境地の達成を眼目とする悟道的神道觀が強く打ち出される。神道とは「心を守る道」（『神道大意』）であり、「心地修行」（『日本書紀神代抄』²⁰）である。心は天地の靈性である神の宿ると

ころであり、この心を媒介として天地の靈性たる神との宗教的一体の境地に到達すること、それが神道であるとされる。

近世の儒家神道はかかる中世神道を世俗世界へと引き戻そうとする運動であった。そこで儒教、とりわけ宋学の思想を神道と結びつけ神道を新しい時代に適合する思想へと脱皮させようとしたのである。具体的には神代卷の神統譜を宋学の宇宙論や易により解釈すること、三種神器を儒教的徳治主義思想によって意味づけること、万世一系の皇統の連綿性を道が実現されていることの証明とすることなどによって、神道と儒教との適合性を説いている。かくして人間が天地自然へと解放される回路としての心は世俗道徳の実践主体としての心へと意味づけしなおされることになった。そして神は人間の倫理性の根拠としてとらえられるにいたる。延佳や惟足の書物においてしばしば天という言葉がちいられ、しかも神と互換性を持つ使い方がなされているのは、かかる神觀念の変化をよく物語っている。

さて、そこで実現さるべき道とは五倫五常の道であるが、同時に農工商の職分の遂行を神道の道として強調している点は、近世社会に適合的な道としての神道の提唱という儒家神道の性格をよく示している。それと同時に、日用生活の道としての神道の提唱は、中世には見られなかった新しい神道観として歴史的に大きな意味をもっていることを指摘しておきたい。

神道が儒教、とりわけ宋学と結び付いたことは、仏教を否定的にとらえる主張を導き出すことになったが、それは一面では神道の世俗化の要請の帰結でもあった。ともあれ、ここに中世まで深く結び

付いていた神仏関係は精算をせまられることになり、以後かかる考え方が神道の主流をしめていくことになった。

第三の点についてであるが、日本の特殊性を自覚し、それを尊重する考え方は中世以来神道思想の中に一貫して存在していることはいうまでもない。その根幹は神国思想である。そのもっとも典型的な例は、

大日本者神国也。天祖ハジメテ基ヲヒラキ、日神ナガク統ヲ伝給フ。我國ノミ此事アリ。異朝ニハ其タグヒナシ。此故ニ神国ト云也。（『神皇正統記』）

との著名な言葉で知られる北畠親房の神国観であろう。即ち日本の神国たる所以は神々によって開かれた国、日神の子孫たる皇統の連綿たる国、君臣ともに神々の子孫たる国、という特殊性に求められている。このような神国思想は儒家神道にも継承されている。それに加えるに、儒家神道ではかかる神国に生を受けたものは日本の道たる神道を奉ずるべきであるという「内外本末の弁」ともいふべき主張があらわれてくる。たとえば延佳の「忠厚の道」の強調がこれにあたる。

日本国の人民、天竺・震旦の宗旨を立て、天竺・震旦を尊て我國をば夷狄ぞ、粟散国ぞ、などいやしむ事も忠厚の道ならず。（『太神宮神道或問』）

惟足また同様である（七）。このような「内外本末」の発想は先に述べた神と儒の習合を嫌い我が国固有の道としての神道をうちたてようとする意識と連関しているものと思われるが、同時に、儒教的華夷思想の影響がはたらいっているものとおもわれる。ともあれ、か

かる発想もまた儒家神道とともに新たに現れたものと考えられる。

以上、本稿では羅山・延佳・惟足の三人の神道思想を中世神道との連続と非連続という観点から検討した。近世に入り、神道はず儒教思想、とりわけ宋学の思想を取り入れることによって、近世社会に適合的な教えへと脱皮をはかる。その場合、普遍的な「道」とその特殊の顕現としての神道という外来思想摂取の論理は、中世神道における儒仏道摂取の論理と共通する。この「道」をめぐる普遍と特殊の関係性の論理は中世以後の神道思想における外来思想受容の論理として一貫して認められるものである。それは同時に優越の論理としても機能した。何故なら、形式的には普遍と特殊の関係は容易に置換可能だからである。平田篤胤の思想はそのよい事例である。

日本の特殊性の強調は、中世以来の神道思想に共通する問題であるが、儒教思想の影響による内外本末を名分とする日本中心主義の論理は、儒家神道によつてはじめて説き出され、以後の神道思想に影響を与えていくことになる。それは外来思想を受容することを通して自らを開示しようとした神道にとつて、その独自性を保つための論理として登場したものと見ることができ。ここに神道は、中世以来の神国思想にあわせてアイデンティティー確保の新たな論理を獲得することになるのである。

ところで、儒家神道は儒教思想の受容を通して仏教思想の排除と、人倫の道、日常生活の道としての神道観を説く。この点は中世神道と大きく相違する面である。それはひとつには儒教、とりわけ

宋学の思想に影響されたためであるが、ひとつには時代思潮の反映でもあろう。しかし、同時に伝統的なカミ信仰のもつていた現世主義的生命観が基盤として存在し、それが儒教思想によつて触発されたという側面も忘れてはなるまい。その意味では、單純に儒教が時代の支配的思想となったから儒家神道が形成されたと断ずることはできない。

注

(1) 今中寛司『近世日本政治思想の成立』二七一頁—二八七頁参照。

(2) 拙稿「林羅山の神道思想」(『季刊日本思想史』第五号)。

(3) 肥後和男「林羅山の神道思想」(『史潮』第四年第二号)。

および岩橋小弥太「理当神道切紙」(『神道史叢説』) 参照。

(4) 以下、『神道伝授鈔』からの引用は、神道大系論説編二十

『藤原惺窩・林羅山』による。

(5) 以下、『羅山林先生文集』からの引用は、『林羅山文集』

下巻による。

(6) 以下、『神道秘伝折中俗解』からの引用は、神道大系論説

編二十『藤原惺窩・林羅山』による。

(7) 以下、『太神宮神道或問』および『陽復記』からの引用

は、大神宮叢書『度会神道大成』後篇による。

(8) 以下、『神道大意講談』からの引用は、大日本文庫神道篇

『吉川神道』による。

(9) 神道大系論説篇十『吉川神道』、三九三頁。

- (10) 大日本文庫神道篇『古川神道』、六五頁。
- (11) 同書、三〇三頁。
- (12) 『続々群書類従』第一、七八一―七八二頁。
- (13) 拙稿「伊勢神道の形成と道家思想」(『東北大学日本文化研究所研究報告』第一三集)。
- (14) 大神宮叢書『度会神道大成』前篇、一八〇頁。
- (15) 同書、六九五頁。
- (16) 日本思想大系『中世神道論』、二三四頁。
- (17) 国民精神文化文獻二〇『日本書紀神代抄』、一五一頁。
- (18) 『続々群書類従』第一、九九頁。
- (19) 平田俊春『元元集の研究』、二〇二―二〇三頁。
- (20) 神道大系論説篇八『卜部神道』上、一八頁。
- (21) 国民精神文化文獻二〇『日本書紀神代抄』、四七頁。
- (22) 日本古典文学大系『神皇正統記・増鏡』、四一頁。

(東北福祉大学助教授)